

# 人間山水図巻

吉川英治

青空文庫



たれかがいま人間性のうちの「盗」という一部分を研究対象としてみたら、近頃ほどその資料に豊富な世間はないだろう。暗黒期といわれた過去の応仁、永正の年代でも、よも今日ほどであったかどうか。だがこういう国家状態のときのこうした現象は、人間の住むところ洋の東西を問わないようだし、またこんな混濁間の底から実は必死な次代の良心が萌芽しつつあることも、史に徴せば期待されないことでもない。

明日は何うなる世かと、時の人々を暗澹とさせた応仁、文明の下からでも、たとえば足利水墨の絵画や、後の生活様式を規矩する工芸が生れていたし、五山の宗教や社会道義の真摯な自

覚もうながされていた。珠しゆ光こうも一いつ休きゆうも雲せつ舟しゆうもそうした  
「闇の世代」の人々ではあつた。だから一概に今を悲観するには  
あたらないし、世相の「悪あく」だけを見て、見えない「善ぜん」を否定  
するのは、過去において「善」のみを肯定して一切の「悪」を無  
視したのと同じ間違いの因にならう。むしろ、裏悪りあくの世よりは、  
表悪裏善の今日のほうが良い未来を約す可能の多い世といえない  
こともないのである。

いやでも応でも、宇宙は刻々に易かわるといふ法則に立つ易学を生  
んだ隣邦りんぼう中国では、さすがに世の転変てんぺんには馴れぬいていたも  
のか、古来盗児とうじに関する挿話そうわは今の日本にも負けないほど多い。  
日本でも年表にしばしば出てくる奈良、平安朝の「諸国に盗賊蜂ほ

起し」の時代から、つい近世の野武士や押込み流行などの頃まで、世がみだれれば必ずその出現はあつたことであり、中国とは正に弟たり難し兄たり難しといつてよいかもしれない。だが何といつても、緑林の徒の横行ぶりも、中国には一日の長がみえ、またどこやらに愛嬌があつたり、その一部人間性にたいして寛大な風のアつたりするのも中国である。盗児をさして梁上の君子とよんだ文化人はヨーロッパにも見あたらないうだ。世の中がよくさえなれば彼等の大部分は良民に回るはずのものだということとを、中国のひとは易学的に自然達観しているのかもしれない。日本にしても、悪に強ければ善にも強いという言葉があるくらいだから、つまるところ両国の盗児観は、世の中次第——という点

で結局一致しているものとも考えられる。

前措おきが長くなつたが、私のこの小篇は、そんな社会課題をとり上げたという程な作ではなく、稀 《たまたま》手近な書から宋代の緑林挿話の小素材をひろい上げ、それに些いささか潤色を加えてみたまでのものである。

北ほく宋そうの世は百六十年もつづいたので、長く北宋に仕えて、生れながらの家門や栄達の保証たのに恃たのみきつていた宋家の朝臣や武人たちは今更のように、国の興こう亡ぼうとはこんなにも脆もろいものであつたかと痛感しながら、落魄うらぶれた身を一変した世の巷ちまたにさまよわせ

ていた。

しやうしやう

蕭照もそのなかの一人だった。

彼は、徽宗皇帝きそてうの全盛時代からの御林軍の一将校であつたから、その扱よつて来た禁門の守りは、天地が覆くつがえろうと易かわるものでないようにおもいこんでいたものだった。ところが、一朝にして宋は金に亡きんぼされ、四都ことごと悉く金のものとなつて、北宋の旧軍官人たちは、生きるだけの身をかくすにさえ、この大陸がせまい世になつてしまつていた。

『まだここに盗み残されている俺というからだだけがある……』

きゆうぼう

窮乏もこうまでになると——これより下には落ちようはな

いという——肚のきまつた自嘲が彼を落着き払わせていた。

河南の都から北へ北へと落ちのびてくる途中何回となく土匪どひや流賊おそてに襲われて、家財も家族も身に着けていた物も、すべてを剥はぎとられてしまい、残ったのは、裸に近い一箇の肉体だけであつた。

部落を見かけると、何とか小屋でも建てて耕作する一畝せの土地でもないかと落着き場所を求めたが、ぜいたくな望みで、小屋はおろか、その時々ときの胃をしのぐ一握りの黍きびも犬の肉すらもありませんのくに困難だつた。

『隣りの県へ行つてごらんなさい』

と親切に教えてくれた農夫もあつた。この県は戦争中の取立と近年ききんにない飢饉ききんとで、見た通りにわとり鶏なの啼なき声一つしなくなつてい



とも云つた。なるほど蕭照はいやが上にも荒涼たる感を抱かせられ、更に数日を隣県の方へあてなくあるいていた。

すると県境の河を渡つてくる葬式があつた。数名の男が柩をかつぎ弔い幡とむらぼたを持って、彼の側をすれちがつた。

『ははあ、殊によると、彼等は例の類たぐいかもしれないぞ』

彼は多少文字を解す男なので、かつて書物で読んだ唐時代の世相をふとおもひ起した。

それは「柳氏叙訓」という書に見たことであつた。著者の

柳公綽りゅうこうしやくが、襄陽じょうようの民政監察官として、その地にあつた

時の見聞を自記したものである。折しも襄陽は凶年だったが、隣の県はもつと窮迫を極めていた。

一日、喪服もふくを着た者が、役所に来て、慟哭どうこくしながら、願書と共に口でも訴えた。

（私は、先祖思いなので、先祖十二人の棺かんを、郷里から武昌ぶしょうの家の方へ移そうとおもい、せつかくこれまで運んで来ましたが、分らずやの川番役人共がどうしても許可してくれません。どうか改葬のための通行証をお下げ渡してください）

（そうか、川番役人は、そんなに分らずやか、わしが行って裁いてやろう）

公綽は、役所から警吏けいりを連れて行って、直に、十二箇の柩こくをかついでいる男たちを捕縛ほぼくしてしまった。後、棺を破つてみると米がいっぱい詰込んであった。いう迄もなく、これは穀物禁輸こくもつぎんゆの

布令を破つて、隣県に米を流し、巨利を獲ようと計つた闇屋たち  
だったのである。

著者の公綽は、どうしてこれを一見して観破かんぱしたかを、その書  
では、得意な民治体験として記しるしているのであるが、いま蕭照の  
空腹にとらわれている頭をかすめたその記憶からは、まったく質  
の異なることなものが考えられていた。

『おい、待て』

彼は、駈かけ戻つて、やにわに、葬式の前に立ちふさがり、

『お前達は、闇屋やみやだろう、棺を下ろせ、棺の中は、米にちがいな  
い』

と、御林軍以来、久しく忘れていた声を出して、脅しにかかっ

た。

すると、樞のそばにいた男が歩いて来て、彼の肩を打ちながら笑った。

『蕭照じゃないか、よせよ、そんな真似まねは』

『やあ……』と、蕭照は忽ち悪党ぶつた見得みえを失つて、どぎまぎと相手の顔を見まもつた。

『……おどろいたね、君か』

『君かもないものだ、御林の旧友を、恐きょうかつ喝かつするやつがあるも

のか。北宋は亡び、金の南宋となつて、年号も建炎二年と革あらたまつ

たが、おたがいが流りゅうぼう亡ぼうしてからでも、考えてみる、まだ一年

と少しか経つていやしないじゃないか。いくら世の中が變つたか

らといって、友達の顔まで忘れなくてもいいだろう』

『けれどこんな所で、君に会おうなんて……しかも君の姿だつて、まったく前の君とは似てもつかないし』

『それやそのはずだ。何しろあの峨々たる大行山脈に住んでいるんだから、俺だつて、かなり野性に返つたろうさ』

『へえ、あんな山の中で、何をしているのだい』

『訊くだけ野暮だろう、近頃、大行山の名物といえば、誰だつて、山賊というじゃないか』

『ふーむ……。君が？』

『なにを蔑むさげすのだ。貴様だつて今、出来心だろうがおれたちを土民の闇屋と見て、その弱身を恐喝しようとしたじゃないか』

『あやまるよ。何しろもう曠野こうやに日は落ちかけているが、わが胃ぶくろには入る物のあてもない』

『ははは、心細いことをいうなよ、まあ来い、大行山へ』

この男は、夏駿かしゆんといつて、共に御林にいた頃は、すこしも曲がった事はきらいな、剛直ともおもわれた人物だったのに、それが山賊になったとは——どうしても蕭照には信じられない気がした。そのくせ自身がふと抱いたさっきの怖ろしい決意には、さしてふしぎとする反省も覚えられなかった。

山の途中へ来て一泊した。宿とした無住の山寺では、山門の聯れんを割り本堂の木像を薪まきとして、夜もすがら暖だんをとった。かついで来た例の柩ひつぎからは、肉でも酒でも何でも出て来た。もちろん皆、

里から盗んで来たものばかりだと、夏駿は事もなげに云った。

『深い山だね、いったいいつ山寨さんさいへ着くのだい』

『なあに、明日あしたは朝のうちに着くさ』

『宣和せんなの徽宗皇帝のときから仕えていた將軍の岳飛かくひが、やはりこの大行山にたてこもって、折々、金の治下なやとなった地方を悩ましていると聞いたが、君もその一党かね』

『そんな噂はよく聞くが、岳飛がどこにいるか、この山にいても少しも知らぬ』

『大行山は大きいなあ』

『いや大きいのは、どうでもこうでも移り動いてゆくものの方だよ。春から夏へ、秋から冬へは、誰にでも豫測されるが、もつと

大いものの必然な推移は、おれたち小人には皆目分らないものだから、遂にこんなにあたふたな目に遭つてしまったのだ。まあまあ北宋もあれでよく百六十余年もつづいたものさ』

『だが、宣和せんなの盛時に生れたら、誰だつて、万代ばんだい不易ふえきとおもうじやないか』

『ばかをいえ。あんなに宋の四都ばかり繁はんえい榮を極めて、それ以外の広い黄土の民が、そういつ迄、王朝の軍官市人の榮耀のために、虐しいたげられたままでいるものか。北宋の朝ちやうは、歴史では、金に敗れたとなるだろうが、実は疾とくに自分自体で敗れていたのさ。遠い前の、唐、晋しん、後漢ごかん、前漢、秦しん、周——の前例どおりさ。よくも人間てやつは分りきつたことを次から次へくり返しているも



のだ』

『まったく、諸国から出た皇帝が立ち皇帝に亡ぼされ、そのたびに何億という人民の膏血こうけつで築かれた皇城が一夜の灰燼かいじんになつてしまつてゐる』

『年号ばかり、建炎あらたと革めても、金の皇帝がまたそれをやれば、同じ轍てつをくりかえすに決つてゐる。ただ長いか短いかだけだ』

『いくら精鋭な衛林えりんの軍と高い城壁で守つてもだめかね』

『そんな事に力を入れれば入れるほど滅亡の日を確約するだけのことさ。なぜならばそれは皆、人民の犠牲によらなければできない事だ。しかもその中には、自然天下の財宝をあつめ、逸楽いつらくと権勢だけに生きようとする人間ばかりを保護する制度ができてし

まう』

『が、朝ちようい威いを振ふるわなければ、人民が伏ひすまいし』

『それが崩ほうかい壊かいの因もとだよ。この世で形あるもので滅めしないものつて何一つあるか。あるとすれば、形の無なきものでなければならぬ。だから出来ない相談さうだんみたいなものだが、不ふ易いならんとすれば、人皇にんかうの左ひだり右みぎへ、財宝さいほうなんぞ置おいてはいけないのだ。それを王宮おうきゆうといえ、後宮こうきゆう三千さんぜんの美び姫き、金銀財宝きんぎんさいほうの山やまを想像さうぞうさせるような、朝威あそいを形かたちづくつたから、何遍なんべんだつて滅ほろぶのだ。当然ぜんぜん瘦土そうどの飢民うきの眼まなこからは、常にそこは大きな物質ぶつしつの対照たいさうにされるだろう。従したがつて、乱みだりが兆きざすと忽たちち業火ごうかと掠奪りやくだつのうき目めにあい、この世ばかりか、その追及おいつは、地下百尺ちかひゃくせきまで追おいかけてゆくじやあないか。——な

ぜならば、何たる因果か、王家の墳墓ふんぼといえは、柩ひつぎの中まで珠しゆぎ

玉よく 珍ちん宝ぼうを詰めこんでゆくものだから、秦朝の墳墓ふんぼといひ、漢

室の墳墓ふんぼといひ、王妃の墓あばで発掘あばかれていないところはな位だ』

『すると、君もいかんことになるね』

『なぜ』

『柩かぶつに財宝を入れて担かぎ歩いてるじやないか』

二人は大笑わらいした。手下ての者は、炬ろのまわりに早はやや寝ころんでいた。

『おい、夏駿なつしゅん。ほかの者が寝ねこんだらしいから云いうが、君はいつたい、どういふ量りょう見けんで、泥棒どろぼうなぞ始めたんだい。よも、本性ほんせいじやあるまいが』

『誰が泥棒などを好きこのんでやってる奴があるものか。だが、仕方がないじゃないか』

『生きるだけの為なら、何とか思案しあんがありそうなものじゃないか』

『じゃあ、蕭照しょうしょう、おまえには思案があるかい』

蕭照は、返辞に困った。

夏駿いっわは偽りのない様子でまたこう云った。

『おれひとりならと思うがね……そこらにごろごろ寝ているのも、みんな流亡のあわれな身の上ばかりの寄り集まりだ。これやあ、どうにも、世の中のせいらしいぜ』

『世の中というのは、べつに有るわけなものじゃあるまい。ここに  
にいる人間の世の中とは、ここに  
いる人間同志の作っているもの

だからな』

『そんな事はない、何たって社会がわるければ、俺たちも、善くは住みかねる』

『だからもつと住みよい、良い世の中を作りたいたいものじゃないか』

『それはたわ言だ。<sup>こと</sup>考えてみる、俺たちはもう南宋の社会からは容れられない人間だ。こうして深<sup>しんざん</sup>山に潜<sup>ひそ</sup>んで喰いつないでゆくの<sup>が</sup>せきのやまじやないか』

『どう理窟<sup>りくつ</sup>をひねっても、泥棒をやっても仕方がないとする理由は見つからないね。何しろ自分が生きるために、果てなく人を犠牲にしてゆくんだからな』

『分ってるよ、分ってるよ、うるせえなあ』

氣にさわったか、夏駿は、獐猛どうもうな顔をして見せながら、仏像の頭を炉の中へ燻くべこんだ。煙りの中に屈かがめこんだ友の肩から横顔に、蕭照は、人間というものが、極めて短い年月のうちに何千年も前の非文明時代の野性に忽ち立ち回かえるものだという事実の影を見たような気がした。

だがそれから、大行山の山寨に、百日ほども同居しているうちに、そんな自覚は持った覚えもないような野人にまで、彼自身も成っていた。つまり蕭照もいつのまにか、平気で旅人を掠かすめ、里に降りては風の如く、人家を荒して去る盜賊の一箇になりきってしまったのである。

ところがその後間もなく、頭かしらの夏駿が、強い旅客に出合つて、

旅客のために、反対に斬り殺されてしまったのである。前身が前身だけに、そこで自然、蕭照が次の頭にあがめられていた。

こうなると彼も今はもう大行山さんちゆう中の大盗の頭目として、悪業の足を洗うことはできなかつた。いや真面目まじめな業に帰ろうなどとは思つてみることもなくなつた。

と、或る年の夏。山寨の下の古寺から、手下共が、ひとりの旅人を捕まえて引っぱつて来た。

『なんだ、こんな薄汚ねえ老いぼれを』

蕭照は、張合いのない顔をした。下の山寺は、ともかく屋根や荒壁はあるので、山中の旅人がよく雨露をしのぎ、折々、居ながらにいいえものを獲るのであつたが、今朝のは、面おもざしは上品な

老人だが、ろくな持物はなさそうだし、衣服を剥はいでも、彼の慾をみたすには余りに不足だった。

『まあいい、裸にしてみろ』

億おっくう劫おっくうそうに、彼は腰かけながら見ていた。手下達は仮か借やくなく

く老人の衣服を解きほぐした。老人は彼等のなす儘にまかせ、子供のように素直すなおだったが、ただ一つ、きたない、囊ふくろ包ろづつみだけは、手に抱いて離さなかつた。

『そいつを奪とつてこつちへよこせ』

蕭照のことばに、荒くれた腕ぶしが、老人の拒みをヘシ折つて、その囊をお頭の手へ移した。

『おや』



この山で見た事もない品がその囊から出て来た。何本かの画筆であり旅たびすずり硯えんであり絵の具であり画冊であつた。

『爺さん、画描えかきかい、お前さんは』

『うむ、そんな者じゃ』

老人は、毛をむしられた鶴みたいにふるえていた。が、そのくせ微笑ほほえんでいるような温顔でもあつた。

『旅絵師というやつかね』

『これでも、徽宗皇帝さまの世には、宣和画院せんながいんのひとりでしたよ。待詔たいしやう金帯きんたいを賜わつてのう』

老人の眸ひとみは回顧をなつかしんでいた。前北宋の画院にいた帝室技芸員の一人と聞いて、蕭照も何だかむかし話もしたくなつたら

しく、

『そうかい、そいつは奇縁だな、俺も実は、御林ぎよりんの兵隊だった事もあるんだ。おいおい着物を返してやれよ、そんなボロを奪つてみても始まらねえ』

それから蕭照は、こつちへ来いと、山寨の中へ彼をつれこんだ。そして酒をのませ粥かゆなど食べさせてみると、この老人のはなしぶりや態度には、どこか飄ひょうこ乎うたる風があつて、わざとらしくなく、また慾よくとく得もなければ愚痴ぐちもなく、聞いていて清流に耳を洗われるような気がした。

『大行山も、この辺りは、もつとも景がよろしい。李思訓りしくんの山水画でも見るようじゃ』

『へえ、どこがね』

と訊き返してから、蕭照はふと、以前の自分には多少あつた書よかん巻の智識を、久しぶりに身に思い出そうとしてみた。が、そんなことを努めてまで話しているのは面倒にもなつて、

『この辺の景色がそんなに気に入つたなら、幾日でも泊つてゆくがいいさ』

と云い放した。そしてその晩以後は、この老画師ろうえしが山寨にいるかないかも知れていた。

が、稀 《たまたま》、彼が念頭にない老画師の姿を、おおまだ居たのかと、見かける時は、老画師はいつも画冊と絵筆を手にして、山を写し、溪けいりゆう流りゆうに見恍みとれ、まったく自然の中に溶け入

つているような姿の人であつた。

『よく飽きないものだな』

折には、蕭照も、絵筆の手元を、のぞき込んでみたりしたが、  
何の感かんきよう興も共にすることはなかつた。

老画師はそのうちに、自分から下の山寺へ居を移し、その後は、この山寨で見かけることも稀れになつた。手下達は、やがて老人が食物を貰いにも来なくなつたので、何を喰つて生きているのかといぶかり合つていた。

秋の一日、あるひ蕭照は退屈まぎれに、老画師の生活を窺うかがいに行つてみた。山門の下の狐狸こりも棲すめないような小堂をいつのまにかきれいにし、老画師は、茶を煮にていた。

『これはおめずらしい。さあお入りなされ』

長いこと忘れていた人間づきあいの世間的なことを、蕭照はふいにここで聞いたような気がして、あいさつにつかえた。

が、とにかく入ってみて、そこらを見廻すと、碗わんといひ炉ろといひ卓いといひ、元より形ばかりの清貧だが、とにかく一高士の隠いんせ棲いともいえる清潔さを保つて、わけて文房具などはちまちまと持主の賞愛をあらわして飾り並ならべてあつた。

『老人、どうしてあんたは此の頃、山寨へ喰べ物を取りに来ないのかね』

『いや、近頃ふもとはの、麓としゆうの衆が、よく喰べ物をくれるのでな』

『へえ……里から？』

『絵を欲しがってな、子どもら迄が、どうかすると遊びにくる』

『ほんとかね』

『わしとて、喰はずには生きておられん』

蕭照は信が措おけなかつた。なぜならば、里の者はこの山中を、盗賊の巢と知っているはずだからである。——嘘でもない気がしたのは、事実老画師が山にはない茶を煮たり、こうして生きている事実だった。

『そんな怖い思いをしても、お前さんの絵をここへ貰いに來る馬鹿があるのかなあ』

彼は、それを知らなかつた自分が、里の者から威いを擲や揄ゆされて  
いる気がしたので、毒づきながら、そばの壁に貼はつてある一つの

絵をじろと見つめた。

眼の前に、老画師の煮た茶の香りが置かれ、老画師は客にかまわずまた絵筆をもつて、べつな試作に他念なくとりかかっていた。

『……………』

蕭照の心にふと自然の何かが映った。その自然美の中に住んでいるがら今まで少しも眼にも心にも映じたことのないものが、どうしてなのか、老画師の絵筆を通した紙の上に初めて彼は観せられたのであった。

飽かずに半日ほど、飽かぬ絵筆のさきを、眺<sup>なが</sup>めてしまった。

そしてやがて山寨の方へ向つて独り帰るさには、今日まで彼が見つつも見えなかつた大自然の美が、生れて初めて見たものよ

うに見えた。

『……はてな?』

その晩、寝ながらも思った。

ひとりの老画師の所には、求めないのに食物が運ばれ、山寨の大男の群は、常に人間の血が号泣ごうきゆうに出逢うのを忍ばなければ生きてゆく糧かてが得られないとすると、……これはすこし意気地がないぞとも考えた。

こうして寝ているまも、おれは今日まで出会って来た無慙むざんな人間の断末だんまつの形相ぎようそうやわめき声が、ともすれば夢寐むびにまでつきまとして、寝ぎめのよかつた朝とてない。それにひきかえ、あの老画師のにこやかさは何どうだ、いつ会つても玲瓏れいろうと笑えるあの



顔は羨やましいものである。——なるほど絵というものもおもしろいものだが、何よりは老画師のあの顔は、自分たちの仲間のうちには類のない顔だ。

そう思うと、彼は自分の醜しゅうあく悪な人相がおもいやられた。初めて山寺の炉べりで友の夏駿の顔に気づいたあの相そうぼう貌が、今の自分にもあるにちがいないと思つた。

『また来ましたよ』

翌日もつい蕭照は老画師の小堂を訪れていた。そしてまた熱心に見入っていると、

『画は好きかの』

と、この老画師としてもめずらしい初めての問いを彼に向けた。

『さあ、嫌いでもないようだな。こう見ていられるところをみると』

『少しずつ、習うてみなされ。どうじやな、今日からでも』

『とんでもねえこツた』

彼は彼自身を侮蔑<sup>ぶべつ</sup>して平氣だった。

『絵なぞ描けるくらいなら、何も 粹<sup>すいき</sup> 狂<sup>きやう</sup>に、こんな山ん中で泥

棒なんぞしている奴があるもんか、このがさつ者の不器用者にや、

とても、とてもよ』

『そんな事はない』

老画師<sup>ろうえし</sup>は、真面目である。そして云うには、人間の本能のうち

には、盗み心だの、残忍性だの、あらゆる悪魔的なものも、当人

が自覚するとしなないとにかか関わらず潜んでいるが、その反対なもの、善真なもの、たとえば絵心のごときでも、実は誰にでも必ずある筈のものなのだ。それを、描けるとか描けないとか、まず後天的な智慧を以て自分を批判し去つてしまふから描くべき性能を出し得ないまでのものである。——もしほんとに眠っているよい本能をゆり起して、素直にそれを現わすしょうじん精進をするならば、反対な悪の本能をよびさますように、それも必ず磨き出されずにはいない。悪をふるい起すほどな善性の屈伏力を以て、善のために悪を抑止するの忍耐をもつたなら——もちろんその理性の堅持はやさしくはないが、ひとり画道にかぎらず何らか人生の明るい彼岸に達しられないはずはない。——とわしはそう思うがと、老画師

はいちど語を切つて、静に、風炉ふうろの上の瓶かめから茶を注いで、蕭照にも与え、

『実をいえばな、こう見えるわしにだつて、折々には、決してよい料りょうけん簡ばかりが起りはせぬ。この年になつても、旅路に飢えうたときにもなると、ふとおぬしと同じような人間になる一瞬ひとときもある』

蕭照はそういう老画師の面を穴のあくほど見た。この人にしてそんな心になる折もあるのかと疑つた。またそれをかりにも行爲の上に出さずに来た人間の心がけによる美しい姿というものを初めて知つた。寺の木像は割つて薪にしても、今の悔恨かいこんとはしないけれど、この人を一度でも裸にして脅した罪は怖ろしいと思

われてきた。

『じゃあ、こんな年をした……この蕭照にでも』

云いかけるうちに、彼の気もちは、二十年も前の少年に似た素朴な在り方に似たものとなっていた。その口から、あらためて弟子入を乞うことばが、われともなくほとぼし迸り出ていた。

『よいとも、身を入れて、教えよう。好きな道じゃ、わしには何の荷にもなりはせん』

老画師は、彼の師たることを約した。

師弟となつて後、蕭照は初めて、老画師の名を知った。李唐りとう、字は古あざなといなきこ、かつては書院の巨匠朱銳とか李迪りてんなどと並び称されたほどな画人であつた。

蕭照は、この人を知ることの遅おそかったのを悔いた。彼は初めからこの老画師に害意はもたなかったものの、また好意の片鱗へんりんも持たなかった。むしろ宣和書院の一員と聞いたときは、むかど、唾つばでも吐きかけてやりたいような衝動しょうどうすらあつた。それといつうのが、こういう柔弱にゆうじやくな文化人共が、徽宗皇帝きそてうをとり巻いて、皇帝をしてまるで一箇の画家か美術の保護者みたいなものに仕立て上げてしまったからこそ、ついに北宋を亡ぼしたのである、そして自分たちにいたる迄、こんな流亡の憂目うきめをみるに至つたのだという日頃の憎悪ぞうおを以て、この李唐をも、頭から軽蔑けいべつしていたからであつた。

——が、いまその非を覺つた彼は、その日から師の李唐の側に

つきつきりで侍かしずいた。朝夕は水を担にない薪たきぎを割り、また師の絵たずさを携たずさえて里に行つては、絵を食物に換えて歸つた。

ふたつの道は歩けなかつた。彼は山寨を解散した。手下たちも、蕭照がつき当つた道にいちどは途方にくれたが、蕭照がひと晩じゆう膝ぐみになつて、噛んでふくめるように話したことを彼等もどうやら理解して、幾年か後には鳥獸の世間でない人なかの世間に於いて、おたがいに明るい話題を持つて会おうじやないかと約束ちりぢりして散々ちりぢりに分れた。

冬も、小堂の師弟は、この山中に一穗すいの灯を点じ雪のふる夜も画道に精進していた。

それからの師弟の足蹟は、数年間、分らなかつた。

南宋となつてから世も暫く小康がつづいた。天下の名画を蒐めた徽宗の宣和御府の儲蔵も、往年の乱で大部分は散逸したが、臨安の新都には、中興館閣儲蔵の制がふたたび設けられた。また宣和画院にならつての画院制も復興された。

北宋の代にまさる芸術の華が、ふたたび南宋の御府に研を競わんとする風を示した。が、それはやはり民衆の生活とその繁栄とは縁もなく発達してゆきそうであつた。心ある人は、かくてはやはり南宋の泰平も、その芸術の殿堂も、久しからずして北宋や唐や漢代の轍をふむものではないかと、どこかで危ぶんでいたことであるだろう。

が、芸苑げいえんの春はともかく南宋画時代を出現した。その中に、



八十歳を超えた李唐も画院に召されて都へ帰っていた。またその李唐の推薦すいせんに依つて、蕭照なる一作家も新あらたに画院の一員に列していた。

季唐はもとより徽宗きそウ以来の大家たいかではあり、晩年にも長卷や大作を描いて、いよいよ北宋画の宗そうたる巨腕を示したが、その門から出た蕭照も、年も趁おうて名声を博し、その作品は、李唐以上に、時人に重んぜられた。

中国の画壇は、以後も梁諧りょうかい、夏珪かけい、馬遠ばえん、馬麟ばりんなどを輩出したが、しかもなお徽宗から李唐、蕭照あたりまでの期間をその黄金時代であつたと史家も回顧している。そして山水さんすい訣けつの著者のごときも、蕭照は李唐から出て李唐にもまさり、董源とうげんの皴しゆう

ほう 法を倣つて董源よりも 勁しゆうけいであるときえ評している。

彼の作品としては、現に虎丘図巻や山居図巻などが遺のこされており、日本画大成の中国篇に収載されてもいる。そしてただ南宋の一世代のみでなく、その仕事は長い生命を人類の中に持った。

それに反して、南宋百五十年の治世も、また元となり明と變へんせ遷し、大きな世乱はなぜかその後も同じような世転の過程をくりかえして来ている。いったいこれは人間共同のやむを得ない法

則なのだろうか。一箇の人間の場合では、一片の発ほっしん心を繪筆に

こめてさえ、かくも長い生命のものを、どう世が變つても決して、禍わざわいを人類に及ぼさない文化的遺産として、香り高く、この地上に遺のこし得ているのに。

(昭和二十二年五月)



# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「東京 創刊号」

1947（昭和22）年4月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 人間山水図巻

吉川英治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>